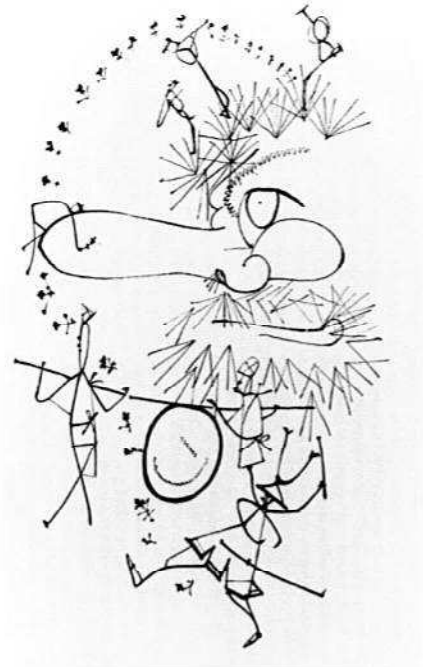
2016

10/15[土]~12/4[日]

小田原文学館

牧野信一の心象風景

小田原文学館特別展　生誕120年記念「牧野信一の心象風景」



牧雅雄《牧野氏像》昭和4年(1929)、小田原市郷土文化館蔵

題字は牧野信一自筆文字より作成。写真は牧野信一、挿絵は「ゼーロン」より転載。

ごあいさつ

今年は、牧野信一が小田原で生まれてから120年、出生地に単身舞い戻り亡くなって80年となります。

小田原文学館では、特別展「生誕120年記念　牧野信一の心象風景」を開催いたします。

牧野信一は、明治29年に小田原町で生まれ、幼少期に父は外国へ渡り、厳格な母と溺愛する祖父母のもとで育ちます。

進学のため上京し文学を志した牧野は、当初は一般的な私小説から出発しました。その後作風を変化させ、私小説の中へ幻想小説を交えた作品世界を描くようになり、「ギリシャ牧野」と呼ばれました。

平成25年の大学入試センター試験に牧野の短編小説「地球儀」が出題され、改めて作品が注目されましたが、現実と幻想との均衡により地球儀のように旋回を続ける牧野の世界は、没後80年を経ても新鮮な驚きを読者に与えています。

生誕百年の平成8年に牧野信一の特別展を開催いたしましたが、今回は、作品に描かれた郷土・小田原の視点を取り入れた展示にも努めました。新たな方々にも牧野の独特な文学世界に触れていただきたいと存じます。

最後になりますが、特別展の開催にあたり貴重な資料をご出品いただき、様々なご支援を賜りました、多くの関係者および団体各位に深く感謝いたします。

平成二八年一〇月

小田原文学館

凡例

1. この小冊子は、平成28（２０１６）年10月15日（土）～12月4日（日）を会期として、小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
2. 本冊子の編集及び執筆は、小田原市立図書館学芸員 鳥居紗也子、白政晶子が行いました。
3. 作品本文の引用は『牧野信一全集』（筑摩書房版）を基本とし、引用の際に新字体に改めた箇所があるとともに、ルビ、傍点、敬称等は適宜省略しました。また、難読と思われる漢字にルビを付した箇所があります。
4. 小説等で著者名の記載のないものは、すべて牧野信一によるものです。
5. 今日の社会通念に照らして不適切と思われる表現や用語が使用されている箇所がありますが、原文を尊重し、そのままとしました。
6. 展示内容と本冊子の掲載内容・資料番号等は異なる場合があります。

資料解説

第1章　牧野信一が育った時代

牧野信一が誕生してから創作を始めるようになるまでの時期を紹介します。

牧野は、明治29年11月12日、小田原町緑一丁目（現 小田原市栄町）に旧小田原藩士の長男として生まれました。父は生誕の翌年から38年まで渡米し、牧野自身も渡米に備え、6歳頃から英会話を学ぶなどし、祖父母からは溺愛され、母からは厳しいしつけを受けて育ちました。

大正3年に神奈川県立小田原中学校（現 県立小田原高校）を卒業し、早稲田大学高等予科に入学。その後本科に進級し、長田幹彦や谷崎潤一郎に親しみ、哲学書やゲーテ全集を愛読します。また、中学時代の同級生、鈴木十郎のすすめで書いていた小説を、次第に甲斐ある仕事と思うようになりました。

1．写真「信一と母ヱイ」明治34年（1901）6月12日　当館蔵

牧野信一は、明治29年11月12日に小田原町緑一丁目（現 小田原市栄町）に、牧野家の長男として生まれた。誕生後数日で亡くなったシンという姉がいたと伝えられる。

母 ヱイは小田原町緑四丁目の海老家の長女であり、幸学校（のちの尋常小田原小学校、小田原市立城内小学校）で約30年間に渡り訓導（小学校教諭）を務めた。

2．パネル「一代 牧野久雄氏」（複製）年不詳　原本所蔵　小田原市立前羽小学校

牧野の父である久雄は、明治25年6月、尋常前羽小学校（現 小田原市立前羽小学校）の初代校長に就任し、27年5月まで同校に勤めた。この肖像写真は、現在も同校の校長室に飾られているものと同じ。27年4月からは、ヱイも勤務していた幸学校で訓導を務めた。その後、牧野誕生直前の29年10月に退職すると、牧野がまだ数え年で1歳前後のうちに渡米し（時期には諸説あり）、10歳近くに成長するまで帰国しなかった。

3．写真「祖父らと」明治34年（1901）2月11日　当館蔵

中央が牧野、右が祖父の英福（ひでとみ）。牧野は、生まれて間もなく渡米した父や、訓導として働く不在がちな母に代わり、祖父母に面倒を見てもらうことが多

1-2

かった。牧野は父親不在の家で、母から武家風の厳しいしつけを受け、祖父母からは溺愛されたという。

4．「書簡」（牧野久雄より牧野信一宛）　明治38年（１９０５）８月21日
当館蔵

日露戦争の頃、アメリカ滞在中の久雄が、息子に向けて出した絵はがき。
「信一ヨ、此絵ノ建物ガ日本ト魯西亜ノ談判ノ家デアル、アメリカ、ニユーハンプシヤイヤ州ポーツマス、海軍鎮守府内ニアルノダ　久雄」

5．賞状（成績優等）　明治37年（１９０４）３月19日
6．賞状（皆出席）　明治42年（１９０９）３月25日　ほか
いずれも当館蔵

牧野は、明治36年に母の勤務する尋常小田原小学校に入学した。
明治40年に同校を卒業すると、高等小田原小学校に進んだ。翌年には学制改革に伴い第一尋常高等小田原小学校と改称され、牧野は尋常科第六学年に編入した。
尋常小学校に入学した頃からカトリック教会の宣教師の指導で英会話とオルガンを習った影響で、中学校の科目では英語がよくできたという。尋常高等小学校の６学年を皆勤で通したことや、成績優等であったことを讃える賞状のほか、級長任命書などが残されており、優秀な生徒であったことがうかがえる。

7．パネル「初代校舎」（複製）年不詳
原資料　神奈川県立小田原高等学校同窓会蔵

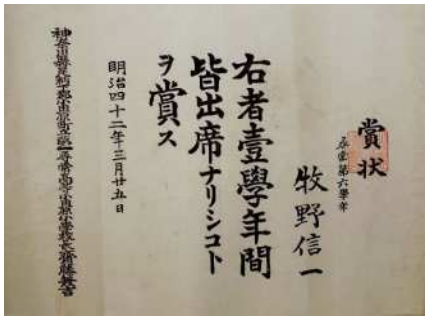
牧野が明治42年に入学した神奈川県立第二中学校（大正２年に県立小田原中学校と改称、現 県立小田原高等学校）の校舎の様子。この写真は明治34年に完成した初代の校舎で、現在の小田原駅の位置にあたる、小田原町緑四丁目に建てられた。

8．パネル「学校教練のラッパ」
原資料　神奈川県立小田原高等学校同窓会蔵

牧野はラッパの名手で、小田原御用邸で皇族の奉送迎をする際などに、先頭に立ってラッパを吹く役目を任されていた。これには、いつも四人ほど上手な生徒が選ばれていたという。現在小田原高校に伝わるこのラッパは、牧野の在学中にも使用されていたもので、牧野も吹いていた可能性がある。

9．パネル「第一回発火演習」（複製）明治38年（１９０５）
原資料　神奈川県立小田原高等学校同窓会蔵

発火演習とは、実弾を用いず銃砲に火薬だけをこめて行う射撃演習のこと。この写真は、三十年式歩兵銃をかついで演習に出かける、県立第二中学校の生徒たちの様子を写したもの。発火演習の際にも、牧野はラッパ卒として先頭で進軍ラッパを吹く役目を果たした。



1-6

1-7

1-8

1-9

10・「相洋」第2号　大正3年（1914）7月

神奈川県立小田原高等学校同窓会蔵

小田原中学の校友会誌。この号には、牧野の代の生徒氏名が成績順に記載されており、牧野は65人中39番であった。終生の友人となった鈴木十郎（のちの小田原市長）の名前もみえる。牧野は晩年に、「私は、小学でも中学でも凡ゆる学科のうちで綴り方と作文が何よりも不得意」であったとし、「旅先などから母親にでも手紙が書き憎くかった」（「文学的自叙伝」昭和10年7月）と回想している。試験で何度も0点をとったとも述べているが、そういった事実は確認されていない。

11・写真「第9回卒業記念」大正3年（1914）3月24日

神奈川県立小田原高等学校同窓会蔵

小田原中学卒業の記念として撮影されたもの。最後列右から3番目が牧野。同級生として、鈴木も一緒に写っている。

12・写真「大学生時代」大正3年（1914）頃

当館蔵

大正3年4月、牧野は早稲田大学高等予科に入学した。「文学的自叙伝」によると、元々「一高の理科へ入学するつもり」だったが、「試験場へ行き、あまり大勢の学生が青ざめてゐるのを目撃すると、一人でも余分に入学させてやりたいと云はんばかりの凡そ意味もない覇気見たいなものに駆られて、そのまま方角も知らなかつた早稲田へ人力車を走らせ」、入学手続（無試験）をすませたという。（※一高…第一高等学校、のち東京大学）

在学中の牧野は、谷崎潤一郎やゲーテを熱心に読んだ。翌年には落第し、浅原六朗、下村千秋らとともに原級にとどまっている。後に発表した「交遊記」（昭和10年1月）には「横浜の知合のアメリカ人のところでヴアヰオリンに熱中して学校を一年しくじつた」とある。

13・早稲田大学卒業証書　大正8年（1919）7月11日

当館蔵

大正5年、牧野は一高受験に失敗し予備校に通っていた鈴木十郎を勧誘し、早稲田大学英文学科に入学させた。自身も、同年9月に早稲田大学本科に進んだ。この頃、鈴木と同人雑誌を刊行する夢を語り合ったという。

8年7月に卒業した際の卒業証書には、当時の総長大隈重信の名前が記されている。

14・「闘戦勝仏」（雑誌「十三人」2年10月号（大正9年10月）

当館蔵

「十三人」大正9年10月号に、早稲田大学在学中の7年8月に執筆された小説「闘戦勝仏」が掲載された。執筆時期では「爪」（同年暮から翌新春頃執筆）よりも前にあたるため、この作が実質的な「処女作」ともいわれる。

1-11

同級生では牧野信一なんかは谷崎潤一郎にすつかりかぶれてゐたやうだ。世の中のことも何も知らん坊つちやんみたいな彼のことだつたから、谷崎潤一郎の作品に溺れて得意だつたのも当然と言へば当然のことである。僕はしばらく同じ下宿に彼と暮らしたことがあつたが、とても性が合はないんで、別れてしまつた。

――岡田三郎「文学的自叙伝」（「新潮」31巻11号、昭和9年11月）

第2章　編集者から作家へ――私小説の世界

牧野が作家としての道を歩み始めた時期を紹介します。

大正8年に大学を卒業した牧野は、時事新報社に入社し、雑誌「少年」「少女」の編集・執筆に関わります。同年に浅原六朗や下村千秋らと同人雑誌「十三人」を創刊すると、第2号に発表した「爪」（大正8年12月）が島崎藤村に激賞されました。

一方、「少女」を介して鈴木せつと出会い結婚、長男 英雄が生まれるなど、私生活にも変化が訪れます。13年には父 久雄を失いますが、父を題材とした小説を多く執筆し、中でも「父を売る子」は、その題名の与える衝撃によって反響を呼びました。

1．写真「時事新報『少年』『少女』時代」大正8～9年（1919～20）　当館蔵

牧野は大正8年7月に早稲田大学を卒業すると、鈴木十郎の義兄にあたる、巌谷冬生（巌谷小波の実弟）の斡旋で時事新報社編集局に勤めはじめた。この間、文芸部主任佐佐木茂索や、作家で英文学者の谷崎精二と知り合うこととなった。この写真は同社にいた頃に撮影されたもので、右から3番目が牧野。

2．「少女小説」秋雨の絶間（雑誌「少女」81号、大正8年9月）　個人蔵

時事新報社で牧野は、雑誌「少年」「少女」の編集・執筆に携わり、多くの童話や詩を発表した。後には「牧野七路」または「七路」というペンネームを用いることもあった。「鳩ちやん号」と題されたこの号には、「牧野信一」の名で「少女小説」秋雨の絶間」を発表している。

3．「嘆きの孔雀」（雑誌「少女」91号、大正9年7月）　個人蔵

大正9年、牧野は「少女」誌上において「嘆きの孔雀」という小説を連載した。

同年3月30日には、帝国劇場で行われた「少女」愛読者大会に出席しており、「少女」に投稿していた鈴木せつとの交際が始まったのも、この年とみられる。

4．七路「オルゴルの夢」（雑誌「少年」212号、大正10年4月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

牧野は「少年」「少女」誌上において、大正10年頃から「牧野七路」「七

2-1

2-2

2-3

路」というペンネームを使用しており、この号は「七路」の名で「オルゴルの夢」（目次は「オルゴオルの夢」）という詩を発表している。

5．「爪」（雑誌「十三人」1年2号、大正8年11月）

当館蔵

「彼」は、自分が「狂人になる」かもしれない、と言って従妹の「道子」に不安を与えようとするが、「爪を燃すと狂ひにな」るという言い伝えを信じ自分を心配しかけた道子に、笑って迷信だと説明してしまい、結局失敗に終わる。

島崎藤村はこの作を読んだ後、牧野に激賞の手紙を送り、文壇デビューへの道が開かれた。中戸川吉二はこの作について、「最後の二行がぶちこはしな蛇足だと思ひます。あの二行の底の割り方で、ありふれた型の小説になつてゐる気さへしました」（後出「牧野信一君の作品」「東京日日新聞」大正9年6月5日、7日）と評した。

6．無署名「『爪』の値金十円」

（雑誌「文章世界」15巻1号、大正9年1月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

「雑記帳」欄に「『爪』の値金十円」と題して、島崎藤村が「爪」を読んで感心し、「さる処より受取るべき稿料金十円を十三人社に寄贈すべく余儀なくされた程「爪」に喜ばされた」という手紙を送って牧野を激賞したことが、無署名で紹介されている。

7．中戸川吉二「牧野信一君の作品」

（「東京日日新聞」大正9年6月5日、7日）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵（マイクロフィルム版）

牧野信一論の嚆矢とされる文芸時評。「爪」を「瓜」、「凸面鏡」を「亞面鏡」とするなどの誤植がいくつかみられるが、「十三人」に発表された牧野の創作のうち7編を「順繰りに一気によんだ」と述べ、「どの作も、簡潔な手法で、要領よく書けてゐる短い小説なので、少しも退屈を感じずによみました」と牧野を評価している。一方で、『公園へ行く道』を除いた6篇は、去年の夏『新小説』で読んだ『亞面鏡』ほど、感服は出ませんでした」「君の作の中では『亞面鏡』が一番優れてゐはしまいか」と述べるなど、以前読んだ「凸面鏡」をより高く評価する内容となっている。

宇野浩二はこの評論について、「牧野が文壇に出るのに一ばん役に立つた」（「牧野信一の一生」『独断的作家論』文藝春秋新社、昭和33年1月）と述べている。

8．「凸面鏡」（雑誌「新小説」25巻8号、大正9年8月）

国立国会図書館蔵（マイクロフィルム版）

牧野が初めて原稿料を得た作品。「姉と弟のやうにして同じ家で暮した道子」の結婚をめぐる「彼」の心の動きや二人のやり取りを描く。

2-5

――私は、ちよつと胸を衝かれた思ひがして、辛うじて苦笑ひを堪へた。さうして、「邪魔らしいですね。」と慌てゝ云つた。何故なら私は此間その地球儀を思ひ出して一つの短篇を書きかけたからだつた。

それは斯んな風に極めて感傷的に書き出した。――

「祖父は泉水の隅の灯篭に灯を入れて来ると再び自分独りの黒く塗つた膳の前に胡坐を掻いて独酌を続けた。同じ部屋の丸い窓の下で、虫の穴が処々にあいてゐる机に向つて彼は母からナショナル読本を習つてゐた。「シーゼーボーイ・エンドゼーガール。」と母は静かに朗読した。竹筒の置ランプが母の横顔を赤く照らした。「スピンアートツプ・スピンアートツプ・スピンスピンスピン――回れ独楽よ、回れよ回れ。」と彼の母は続けた。

――「地球儀」

2-8

9．「地球儀」（雑誌「文藝春秋」1巻7号、大正12年7月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

祖父の法要のため小田原に帰った「私」は、自分が書きかけた短篇のモチーフとなった、押入れの隅の地球儀を見て胸を衝かれる。その小説は、渡米した父を日本で待つ家族たちが、地球儀でアメリカにいる父の居場所を確認し、地球儀を回転させて父が早く戻るようにと祈る、という内容であった。

平成25年には、大学入試センター試験の国語にこの作が出題され、その独特の言い回しなどから話題となった。

10．パネル「関東大震災直後の小田原」　大正12年（1923）

原資料　当館所蔵

大正12年9月1日に起こった関東大震災によって、小田原は大きな被害を受けた。当時牧野は妻子とともに熱海町（現 静岡県熱海市）に住んでいたが、震災の後、被災を免れた小田原の実家に移った。写真は全滅したお堀の桜並木。

11．雑誌「随筆」創刊号（大正12年11月）

当館蔵

牧野が編集員を務めた雑誌。宇野浩二の回想によると、この雑誌の編集にかかる仕事のうち、牧野は作家への訪問と事務を引き受けたものの、訪問はよくこなしたが事務は一向に進まなかった。牧野ははにかみ屋で訪問は大の苦手だったというが、この訪問の仕事によって久保田万太郎や葛西善蔵を知ることとなり、二人を訪ねるといつも長居をした。牧野は二人のことを、酒の飲みっぷりがよく杯の持ち方がうまいと激賞していた。

12．写真「葛西善蔵と牧野」大正12～13年（1923～24）頃

当館蔵

左が葛西善蔵。牧野が「随筆」の編集者を務めていた頃に撮影されたもの。牧野は特に葛西を私淑して、よく葛西を訪ねており、二人は一緒に酒を飲むことが多かった。昭和3年7月に葛西が42歳で死去した際、牧野は追悼文を書いている。

13．「書簡」（葛西善蔵より牧野信一宛）昭和2年（1927）12月7日付

当館蔵

七里ヶ浜鈴木療養所から出された葛西の書簡。この頃、牧野は葛西に仲介を頼んで改造社に原稿を売り込もうとしていた。「二三日前改造の編輯の人が来ての話しでは、十二三日校正済むまでは非常に多忙で社長にも編輯員にもほとんど会談が出来まいとのこと故、そのつもりにて執筆されるよう」とあり、要求を通すのが難しいことを伝えている。

2-10

私は、別段葛西氏に対して私自身を遠慮したといふ感じはない。私は、一体に遠慮深い私自身を凡そ自由気儘に、私のまゝに朗らかに翼を伸させて呉れた先輩として君を忘れることは出来ない。

――「断想的に」（「新潮」25巻9号、昭和3年9月）

2-12

14・「スプリングコート」（雑誌「新潮」40巻1号、大正13年1月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

オーバーコートを買うための金を使い込み、やむを得ず実家から探し出した父の古コートを着ていた「彼」は、友人にそれを譲ってほしいと頼まれるが、虚栄心が出てしまい、自分も気に入っているからと断ってしまう。

作中、「あなたが『熱海へ』とかといふ小説みたいなものを書いたでせう？」という、牧野が執筆した小説のタイトルや、中戸川吉二など実在の人物の名前が登場するなど、牧野自身の実生活を強く想起させる内容となっている。

「貧しき文学的経験」（大正14年6月）によると、この小説執筆前後から「本当に文学をやらうと決心した」という。

15・「父を売る子」（雑誌「新潮」40巻5号、大正13年5月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

牧野の父、久雄をモデルにして書かれたとされる「父親小説」で、「一」から「三」までと、序にあたる冒頭部分を加えた4部からなる。

序では、「彼」は「自分の父親を取りいれた短篇小説を続けて二つ書」き、今書いている小説が出来あがったら「それに『父を売る子』という題名を付ける気でいる」と紹介される。続く「一」「二」では、まだその小説を書いていなかった頃の「彼」と父親とのやり取りが描かれる。「三」では再び、「父を売る子」と名付ける予定の小説の執筆を再開した時点に戻るが、「彼」の父が亡くなり、別の小説に「父を売る子」という題名を「奪ってつけることにした」と説明されている。発表当時、題名の与えるインパクトによって反響を呼んだ。

久雄はこの小説執筆の直前、大正13年3月9日に急死しており、牧野は父の死というショッキングな出来事を、時間をおかずに小説に取り入れている。

16・『父を売る子』新潮社、大正13年（1924）8月

個人蔵

牧野の最初の作品集。新進作家叢書第40編として新潮社から出された。

17・「唐鉾流元祖覚尊坊ヨリ十三代進藤弥一衛門盛庸迄画像」年不詳

当館蔵

牧野の曾祖父にあたる牧野作兵衛英清は、唐鉾流棒術の12代目であった。本資料は、13代目までの系譜を記したもの。

「父を売る子」の中には、「僕の幼い時分は、正月などにはきつとおぢいさんが、僕達を作兵衛英清の懸物の前に坐らせてお辞儀をさせたぜ」「作兵衛英清は何でも下ツ端の剣術使ひだとよ」という台詞が出てくるが、本資料が「懸物」のモデルになったと考えられる。

18・「父の百ケ日前後」（雑誌「中央公論」39巻11号、大正13年10月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

父の没後百か日を迎える「彼」が、父の存命中を思い出しながら、「父が

2-14

2-15

2-16

「何でも家ぢや長男には英の字をつけなければいけないんだつてさ。」父は、軽く慌てゝ、それでもう孫を男と決めて、ごまかさうと試みた。〔中略〕

「第一阿父さんや僕は、長男だが英ぢやないぜ。」

「英の字をつけないと碌な者にならないんだつてさ。」さう云つて彼の父は、彼の顔を見た。――そして二人は思はず噴き出した。

「さう云つて見れば弟の方が僕より好ささうだね、学校なども何時も優等で――」

「さうだなア、ともかく今度は間違ひなく英の字を付けようぜ。」

――「父を売る子」

留守」のときに「父を冷笑的に批評してゐた」伯父と母に対して反発する様子などが描かれている。大正13年8月に書かれたこの小説の原稿が、葛西善蔵を通じて、当時「中央公論」編集長を務めていた滝田樗蔭に送られた。樗蔭はこの作に「父の百ケ日前後」と名付け、同誌の10月号に掲載した。これ以降、樗蔭の存命中、牧野はしばしば「中央公論」から原稿依頼を受けることとなった。

19・「「悪」の同意語」（雑誌「中央公論」40巻4号、大正14年4月）

原本所蔵　国立国会図書館

母を題材にした「母親小説」。一風変わった題名は、当時「中央公論」の編集長だった滝田樗蔭によるもの。

20・写真「阿佐ヶ谷時代」大正末頃

当館蔵

牧野は、大正14年に杉並町阿佐ヶ谷（現 杉並区阿佐谷南）に転居した。この写真は、庭でせつ夫人とともに撮影されたもの。

21・「西瓜喰ふ人」（雑誌「新潮」24巻2号、昭和2年2月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

牧野が私小説から幻想文学へと転回し、「ギリシャ牧野」と呼ばれるようになっていった時期に発表された作で、牧野文学の中でひとつのメルクマールとされる。

「余」という一人称の人物の視点から、友人の小説家「滝」と「余」との日常のやりとりが描かれるが、途中に挿入される註によって「この文の筆者であるBは滝と同年で三十一二歳の理学士である」と説明される。さらに読み進めると、「B」（「余」）は「滝」の毎日の行動を観察しており、読者が読んでいる文章はその観察日録であることが明らかとなる。しかし、結末近くに再び挿入される註で、「B」が眠った後に「滝」がその日録を読んで毎晩原稿用紙に書き写して小説にしていることが明かされる、という複雑な構造を持った作。

22・「鱗雲」（雑誌「中央公論」42巻3号、昭和2年3月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

「西瓜喰ふ人」に続いて発表された作で、ともに牧野文学における転換点に位置づけられる。この作が発表された頃の牧野は、神経衰弱になっていたともいわれている。

2-18

2-19

2-20

2-21

第3章　ギリシャ牧野の幻想文学

幻想的な作風に移行し、牧野にとって「最も意気軒昂（いきけんこう）な時代」といわれる時期を紹介します。

私小説家として知られるようになった牧野ですが、ギリシャやローマの古典の影響を受け、「村のストア派」（昭和３年６月）、「吊籠と月光と」（昭和５年３月）など、幻想化された小田原を舞台に神話的な物語を次々と執筆し、「ギリシャ牧野」と呼ばれるようになります。昭和６年10月発表の「ゼーロン」は、牧野の幻想物語の代表作として知られます。

一方、小田原と東京を行き来するなかで、宇野浩二や坂口安吾などの文学者のほか、画家の朝井閑右衛門や作家の川崎長太郎など、小田原にゆかりの深い著名人たちとの交流も深めました。

1．「村のストア派」（雑誌「新潮」25巻6号、昭和3年6月）　当館蔵

「樽野」は、自宅の物のみならず蜜柑山や畑まで「差押へ」にあっているが、物を失うという恐れよりも、「相手の容赦なき殺気だけを感じて、気が遠く」なってしまう。作中に登場する音楽隊の描写は、ラッパの名手であった牧野の中学時代の姿を想起させる。

この作を執筆した頃に宇野浩二による訪問を受けた際、酔っていた牧野は「ソクラテスの弁明」を歌舞伎調で暗唱したという。

2．原稿「僕の運動」（複製）　（初出「スバル」2巻5号、昭和5年5月）
原本所蔵　早稲田大学（画像提供　早稲田大学古典籍データベース）

3．「僕の運動」（雑誌「スバル」2巻5号、昭和5年5月）　個人蔵

「僕は田舎にゐると毎朝毎夕欠かすことなく不思議に勇壮な運動を試みます」という書き出しで始まり、「僕の運動」について「フエンシングの練習をしてゐる、棒高跳びをする、器械体操を試みる」などスポーツの種目に続き、「大酒を喰ふ、舟を漕ぐ、夫婦喧嘩をする、美女を追ひ廻す」など「運動」とは言い難いものまで、ユーモラスな筆致で書き綴った短い随筆風の文章。

4．「西部劇通信」（雑誌「作品」1巻2号、昭和5年6月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

5．『西部劇通信』春陽堂、昭和5年（1930）11月　個人蔵

田舎の村にやってきた「僕」が、他に着る物がなかったために「或る止むを得ない都合から僕が一着持つてゐた」「アメリカ・インデアンの衣裳」を身につけ、「おそろしく古めかしい唱歌を恰（あたか）も今日の流行小唄でゞもあるかのやうに」歌いながら田舎道を歩いていたところ、「これが近頃都の流行

3-2

3-4

3-5

の尖端を切るいでたちなのか」と村人に勘違いされてしまったことから起こった騒動を、都の友人に送った手紙という体裁をとって、ユーモアを交え描いている。単行本は銀色の装丁が眼を惹く。

6．「ゼーロン」（雑誌「改造」13巻10号、昭和6年10月）

個人蔵

「私」が、駄馬ゼーロンとともに、自身をモデルに制作されたブロンズ像（マキノ氏像）を背負って「龍巻村」まで運ぼうと悪戦苦闘する物語。小田原とその周辺の地域をモデルとして書かれたと考えられるが、その舞台はあたかもギリシャのとある村であるかのような錯覚を読者に抱かせる。「ギリシャ牧野」といわれる神話的物語である。後に芝書店刊『鬼涙村』（昭和11年2月）に収録される。牧野中期の幻想文学の代表作。

7．牧雅雄《牧野氏像》　昭和4年（1929）

小田原市郷土文化館蔵

小田原出身の彫刻家 牧雅雄による、牧野をモデルとして制作されたブロンズ像。「ゼーロン」のほか、「心象風景」などに登場する像もこの《牧野氏像》がモチーフとなっている。牧野と牧が知り合ったのは、この像が完成した昭和4年以前であることがわかるが、正確な時期は不明。本作品は同年に開催された再興第16回日本美術院展に出品され、牧野は同年9月19日付で鈴木十郎に向けて「僕が行く前に若し閑があったら、院展へも行って見給へ」との手紙とともに同展の招待券2枚を送っており、同展を見学するつもりであったようである（実際に見たかは不明）。同書簡にはさらに「この間は牧さんのアトリエで未だ十五夜にもならぬうちに月見の宴を開いて二夜野蛮な歌をうたった。東京から来た出席者の一人で「ブロンズまで」の木兎の捕獲者で、そしてブロンズになっておそらく院展では僕の隣りに並んでゐるであろうS君は今もつて流連で小田原の秋に見とれてゐる」とあり、同時出品された牧の《佐々木氏像》にもふれている。小田原の谷津にあった牧のアトリエには、牧野、福田正夫、川崎長太郎といった小田原の文学者のほか、画家の朝井閑右衛門、上大井村村長の瀬戸佐太郎、「ペンキ屋」を営む山内画乱堂など、「日暮れになるとひとくせある酒呑達が、いつのまにか集まってきた」（朝井閑右衛門「サンニー・サイド・ハウス」『サクラの花びら』昭和51年3月）という。

8．「バラルダ物語」（雑誌「中央公論」46巻12号、昭和6年12月）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

「文科」第2輯発行の少し後、昭和6年11月下旬、牧野は芝区三田南寺町（現 港区三田）の借家に転居するが、この頃から牧野とせつ夫人の間にいさかいが起こるようになる。坂口安吾の回想によると、「当時牧野さんは恰も某婦人（かりにA婦人とよぶ）と恋愛があるかのやうにその人生を仮構してしまつた」（「牧野さんの死」昭和11年5月）ことが原因であったようである。そういった私生活にさす影を尻目に、牧野は「ゼーロン」「心象風景」と

3-6

3-7

3-8

いった佳作を生み出したが、「バラルダ物語」もそのひとつである。登場人物「私」の生活は苦しいが、作品そのものに暗さはただよっていない。

9．写真「御幸ノ浜にて」昭和４年（１９２９）　当館蔵

左から息子の英雄、妻せつ、牧野、せつの妹 修子、藤浦洸（詩人、作詞家）。

10．写真「早川にて」年不詳　当館蔵

左から藤浦洸、岩越昌三、川崎長太郎、牧野、朝井閑右衛門。

11．パネル　朝井閑右衛門《積藁のある風景》昭和３年（１９２３）頃　原本所蔵　横須賀美術館

大阪出身の画家である朝井閑右衛門と牧野が初めて出会ったのは、昭和３年の夏、小田原の御幸の浜海水浴場であった。

この絵は、牧野、川崎長太郎、詩人で作詞家の藤浦洸などが田んぼの積藁にもたれている様子をとらえた写真と同じ場所を描いたとみられる。

12．「サンニー・サイド・ハウス」（雑誌「若草」６巻５号、昭和５年５月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

昭和３年頃、朝井閑右衛門は小田原の早川にアトリエをかまえた。朝井の回想によると、そこへやってきた牧野は『『こりゃ、いい。気に入った。ボクもここで仕事をしよう』といって、本当にそこの一番いい丸窓の部屋に、机と原稿用紙をもちこんだ」うえ、「板きれに……SUNNY SIDE HOUSE……と書いて標札をつくった」という（前出、朝井閑右衛門「サンニー・サイド・ハウス」）。

13．「心象風景」（雑誌「文藝春秋」11巻3号、昭和８年３月）　個人蔵

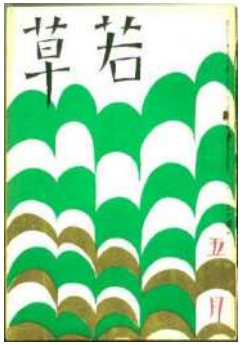
14．「心象風景（続）」（雑誌「文藝春秋」11巻6号、昭和８年６月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

「心象風景」は、元々は「文科」に連載されたものが始まりであったが、「文科」は意図せず第４輯で終刊を迎える。それから約１年後に「文藝春秋」に二回に分けて掲載されたこの作には、冒頭に以下の序文が付されている。

「岡といふ彫刻家のモデルを務めて私がそのアトリエへ通ひ、日が延びる程の遅々たるおもむきで、その等身胸像の原型が造られてゆくありさまを緯となし、その間に巻き起る多用なる人事を経として、そしてその胸像が完成される日までを同時に本篇の完結と目指して、これには凡そ四五十枚の前篇がありますが、それはそれとして、新たに稿をすゝめます」。登場人物なども共通しており、「文科」連載分の後篇と位置づけられる。

3-9

3-11



3-12

3-13

15・『風博士』（雑誌「文藝春秋」９巻７号、昭和６年７月別冊付録「別冊文壇ユウモア」）

神奈川県立神奈川近代文学館蔵

昭和６年、牧野は「青い馬」第２号、第３号にそれぞれ掲載された坂口安吾の「風博士」と「黒谷村」を読んだ。昭和６年８月に宇野浩二に会った際、これらを高く評価していることを話し、後日掲載誌を送ったという。さらに牧野は「文藝春秋」別冊付録と「新潟新聞」においてこれら２作を評価し、安吾が文壇に登場するきっかけをつくった。

16・雑誌「金と銀」創刊号、大正９年（１９２０）４月（複製）

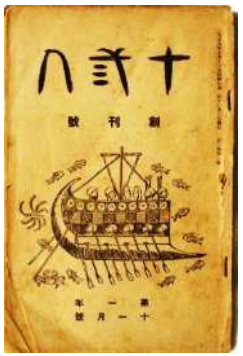
当館蔵

鈴木十郎、浜野英二とともに創刊した同人誌。牧野は創刊号に「I am Not A Poet, But I am A Poet.」を発表した。同誌は３号で終刊し、大正９年８月創刊の「象徴」に発展する。

17・雑誌「十三人」創刊号、大正８年（１９１９）10月

当館蔵

時事新報社時代の大正８年11月１日、早稲田大学英文科を卒業した牧野の同級生を中心として創刊された。編集発行人は下村千秋。同人が13人いたことからこの誌名がつけられた。当時の雰囲気について、牧野はのちに「僕が一等不熱心で、常に同人から叱責された」（「貧しき文学的経験」大正14年６月）と回想している。小田原市立図書館に全25冊が揃いで保存されている。



3-17

18・雑誌「文科」１～４輯　昭和６～７年（１９３１～３２）

当館蔵

昭和６年10月、牧野を編集主幹として創刊された雑誌。編集実務は春陽堂の難波卓爾（なんばたくじ）が担当した。詩、評論、小説、翻訳など、その内容は多岐に渡っている。執筆者には、井伏鱒二、嘉村礒多（かむらいそた）、河上徹太郎、小林秀雄、堀辰雄などのほか、坂口安吾、三好達治など後に小田原に滞在する作家の名もみえる。このような執筆陣の多彩な顔ぶれも「文科」の魅力である。実際に発行されたのは第４輯までであるが、５冊目も準備されていたことがわかっている。

19・原稿「心象風景」（雑誌「文科」１～４輯掲載）（複製）

個人蔵

平成３年頃、雑誌「文科」第１輯の原稿の揃いが発見された。一冊の雑誌の寄稿者すべての原稿が欠けもなく残されていたことは珍しく、貴重である。原資料は編集者難波卓爾が保存していたもので、一冊の本として綴りあわされている。

牧野の「心象風景」は第１輯から第４輯まで連載され、第１輯以外にも原稿が残されており、本資料はその複製である。

合綴されたものを複写しているため、原稿用紙の１枚目の左半分と２枚目の右半分が一枚にまとめられている。表題の横に「牧雅雄君へ贈る」と記さ

3-19

れているが、ペンで抹消されている。さらに登場人物の「岡」は、元々は「槇」であったことがわかる。これ以外の修正は、漢字や言い回しの訂正などがいくつか見られる程度で、大きな書き直しなどは見あたらない。

20・原稿「ユレカ」（複製）昭和6年（1931）　個人蔵

「文科」第2輯および第3輯に、牧野は小林秀雄とともにエドガー・アラン・ポーの「ユレカ」を訳出して掲載した（未完）。本資料はその冒頭部分。牧野は小林の才能を早くから見出しており、この頃、宇野浩二を訪ねた牧野は、一緒に連れてきた当時29歳の小林を「小林君は、もつとも有望な評論家です」（前出「牧野信一の一生」）と紹介したという。

21・「心象風景」校正刷り　昭和6～7年（1931～32）　当館蔵

牧野が主宰した雑誌「文科」は、第4輯まで刊行されたが、坂口安吾の連載小説「竹藪の家」の第4輯の末尾に（つづく）と記されるなど、第5輯も刊行する予定であった形跡が残されていた。その後、牧野の死後約50年を経て、遺品の中から「心象風景」の連載第5回目として書かれた原稿の校正刷りが発見された。この内容は、第4回目が発表されてから約1年後に「文藝春秋」に発表された「心象風景」の続篇とは異なっている。

3-20

第4章　最期の日々

晩年の創作活動や死の前後の様子、没後の顕彰活動などを、遺された資料などから紹介します。

編集主幹を務めた「文科」が昭和7年3月に終刊すると、同年秋頃から飲酒量が増えて神経衰弱の兆候が現れ、作風にも現実的な暗さがただよいはじめます。せつ夫人とのいさかいや持病などにも苦しみ、11年に東京から単身小田原に戻ります。

妻子と離れ、心身ともに追い詰められた状況にあった牧野を見かね、旧友の鈴木十郎が新聞用連載小説の執筆を勧めます。これに応え、牧野は「サクラの花びら」（原題「勝盃」）を書き始めますが、執筆途中の同年3月24日、実家の納戸で縊死自殺を遂げ、39年の生涯を閉じました。

1．写真「家族と共に」昭和9年（1934）12月25日　当館蔵

妻 せつの妹である千代子の家でクリスマスを祝ったときのもの。左から、牧野、せつ、英雄、千代子。

2．「鬼の門」（雑誌「中央公論」47巻9号、昭和7年8月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

昭和7年5月中旬、牧野は本郷の菊富士ホテルを仕事場としていた広津和郎を訪問し、原稿をいずれかの出版社へ仲介してくれるよう依頼した。同日、広津は牧野を連れて日本国民社を訪ねたが、はかばかしい返答を得られなかった。二人はその足で中央公論社へ行き、広津が社長の嶋中雄作に話を持ちかけたところ、嶋中は二つ返事で承諾し、「中央公論」へ掲載されることとなった。このとき牧野が持参したのが「鬼の門」の原稿であったとみられる。

3．「泉岳寺附近」（雑誌「新潮」29巻10号、昭和7年10月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

「私」が、泉岳寺前の「陣太鼓」という居酒屋の息子の「守吉」に翻弄される話。「私」の作家仲間として「坂口按吾」などが登場する。

4．原稿「病状」昭和9年（1934）
5．原稿「喧嘩咄」昭和10年（1935）
6．未定稿「酒友大風譚」年不詳
7．未定稿「無題」年不詳　いずれも当館蔵

自筆原稿。「病状」および「喧嘩咄」は生前にそれぞれ「文学界」（昭和9年7月）、「文芸法談」（昭和10年4月）に発表されたが、「酒友大風譚」および「無題」は生前未発表のまま残されていたもの。

8．エドガア・アラン・ポウ著、牧野信一　小川和夫共訳『ユリイカ』芝書店、昭和10年（1935）8月　個人蔵

傍注には「物質的並びに精神的宇宙についての論文」とある。

9．「淡雪」（雑誌「文藝春秋」13巻12号、昭和10年12月）　個人蔵

少年「新吉」の父 英介はアメリカにおり、息子に向けて写真や手紙を送ってくる。祖父は英介からの手紙が届くと地球儀を見つめるなど、「地球儀」、さらには牧野の少年時代の記憶とも重なるようである。

10．「熱海線私語」（雑誌「日本評論」10巻12号、昭和10年12月）　神奈川県立神奈川近代文学館蔵

牧野の晩年の代表作「熱海線私語」は、昭和9年に丹那トンネルが開通し、『淡雪』も『熱海線私語』も、少年時代の思ひ出や物語が出て来るためでもあらうか、いや、そればかりではない、いかにも楽しさうに書いてあるのに、私は、大へん驚いた。『淡雪』は、少年時代の思ひ出らしいものが後の方に出てくるけれど、主として、自分の、父母と祖母と、祖父の従弟妹にあたる人びとの若き日の事どもを、浪曼風に書いてあるので、どこまでが本当かどこまでが嘘か分からないやうなところがあるが、美しい物語で、作者はいかにも楽しさうに書いてゐる。それから、『熱海線私語』は、少年時代の物語を中心にした二人称の小説で、初めの方では、祖父と祖母を語り、次ぎに、父の滞米時代に移り、それから、父が帰つてからの生活と、父がアメリカから連れて来た異母妹の話に至るまで、牧野の作品としてはめづらしく平淡な文章で書かれてゐる、楽しい小説である。

牧野は、生涯のうちでもつとも苦しく切羽つまつた時に、このやうな美しい物語と楽しい小説を書いたのである。

――宇野浩二「牧野信一の一生」（『独断的作家論』文藝春秋新社、昭和33年1月）

4-8

「熱海線」という名称が「抹殺された」ことにより「私達の思ひ出」も「抹殺」されたという書き出しで、鉄道にまつわる「私」の思い出を中心に物語が進んでいく。「余程成長してから始めて父親の姿に接し」たという「私」と父親のやりとりなど、牧野自身の幼少期の思い出を髣髴（ほうふつ）とさせる場面が随所にみられる。

11・草稿「サクラの花びら」昭和11年（1936）

当館蔵

未完。明治38年、日露戦争の最中のアメリカと日本を舞台に、ワシントン大学蹴球部の選手として活躍するヘンリーこと「大津弘雄」と、日本に残された家族の様子が描かれている。

当時、妻子と離れ、小田原の実家で孤独に苦しんでいた牧野を見かねた旧友の鈴木十郎が、新聞連載用小説の執筆を勧めた。それに応えて書き始めたのが「勝盃」という作であった。のちに「サクラの花びら」と改題されたこの小説を、鈴木は朝日新聞に原稿を持ち込み掲載について依頼していたが、昭和11年3月24日、相談がまとまらないまま、牧野は実家の納戸で縊（い）死自殺を遂げた。死の当日、机の上には「サクラの花びら」の草稿が遺されていた。

12・『鬼涙（きなだ）村』芝書店、昭和11年（1936）2月

13・『酒盗人』芝書店、昭和11年（1936）3月

いずれも当館蔵

牧野が亡くなる直前、2冊の作品集が相次いで刊行された。『鬼涙村』は箱が黒、本は白を基調として、それぞれ白または黒の縦線が引かれているというデザインで、『酒盗人』はそれとは逆に、箱は白、本は黒を基調とし、それぞれ黒または白の縦線が引いてある。宇野浩二はこの装丁を初めて見た際、不吉な、縁起の悪い気がしたという。

14・スクラップ「牧野信一死亡当時の新聞記事」昭和11年（1936）

当館蔵

牧野の逝去を報じた新聞紙面や追悼記事を、弟の英二がスクラップしたもの。小学校時代に祖父母らと写した写真なども貼り込まれている。

15・坂口安吾「牧野さんの死」（雑誌「作品」7巻5号、昭和11年5月）

16・坂口安吾「牧野さんの祭典によせて」（雑誌「早稲田文学」3巻5号、昭和11年5月）

17・坂口安吾「南風譜」（雑誌「若草」14巻3号、昭和13年3月）

いずれも神奈川県立神奈川近代文学館蔵

牧野にその才能を認められ、生前から親交のあった坂口安吾は、牧野の死後、いくつかの追悼文や牧野をモデルとした創作を発表している。

4-9

4-11

牧野が死ぬ前の日に送つて来た『酒盗人』と前の『鬼涙村』をならべて見て、私は、何ともいへぬ「不吉」な（縁起のわるい）気がした。

私が汽車の中でこの話をすると、中戸川は、「さうです、僕も同感です、あれは『喪』の感じですよ」と云つた。

――宇野浩二

前出「牧野信一の一生」

4-14

18・牧野信一名刺　年不詳

当館蔵

いつ頃使っていたのかは不明だが、牧野が生前使用していたとみられる名刺である。

19・宇野浩二《ゴーガンに与へたるゴッホの自画像》模写　大正末頃

当館蔵

宇野浩二が生前の牧野へ贈った模写。原作品は、１８８８年９月にゴッホがアルルで描いた《ゴッホ》（フォッグ美術館蔵）。この時期は、ゴッホが熱望した、ゴーギャンとの共同生活を開始する直前で、ゴッホはゴーギャンと自画像を交換し親愛の証とするために描いた。

模写の裏面には、クルト・ピスター著、中川一政翻訳の「ゴオホ論」（『ゴオホ』アルス、大正14年）の第１章が引用され、この絵は《ゴーガンに与へたる自画像》というタイトルで同書の口絵にカラー図版で掲載され、感銘を受けた宇野が、模写と引用を作成したと考えられる。

ゴッホは、自我の肯定を標榜する白樺派を中心に、芸術のために生涯を捧げた天才画家として明治末から大正期の日本で熱狂的に受け入れられた。ゴッホとゴーギャンの交流を踏まえて製作された模写は、宇野と牧野の深い友情を示し、さらに彼らもまた「白樺」に感化されたことを物語る。

20・中川一政『ゴオホ』アルス、大正14年（１９２５）４月

当館蔵

中川一政訳「ゴオホ論」を収録。口絵に宇野浩二が模写した絵の元となったゴッホの自画像がカラーで掲載されており、宇野はこの著を参考にゴッホを描き、牧野に贈ったとみられる。

21・『牧野信一全集』（全３巻）第一書房、昭和12年（１９３７）

当館蔵

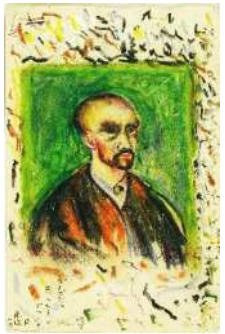
昭和12年３月から７月にかけて、牧野信一全集が刊行された。題字は島崎藤村による。編集委員は、宇野浩二、久保田万太郎、中戸川吉二、河上徹太郎、小林秀雄。

22・「牧野信一文学碑建立趣意書」昭和50年（１９７５）

当館蔵

牧野の没後20年にあたる昭和31年、小田原市中町の清光寺に新しく牧野の墓碑が建てられた。同年４月23日には、久保田万太郎、井伏鱒二、榊山潤、浅原六朗、佐々木茂索、尾崎一雄、川崎長太郎など、牧野と親しかった人びとが参列し、二十年忌墓前祭が営まれた。当時小田原市長となっていた鈴木十郎も出席した。墓碑は新しくなったが、文学碑は建てられていなかったため、これを残念に思う人々が「牧野信一の文学碑を建てる会」として集まった。

4-17



4-19

23・原稿「文学碑建立記念誌用」昭和51年（1976）頃

当館蔵

昭和49年、牧野信一の文学碑の建碑事務局を小田原市の図書館におくこととなり、第1回発起人会が行われた。翌年から趣意書を発送し、募金活動を開始した。その後、碑文や建碑候補地の選定が行われ、昭和51年3月21日、除幕式が挙行された。またこれを記念し、「牧野信一文学碑建立記念誌」が作成され、井伏鱒二、河上徹太郎、山本健吉、朝井閑右衛門らが寄稿した。

24・写真「牧野信一文学碑」

当館蔵

牧野の母校、小田原高校にほど近い城山公園内に建てられた、牧野の文学碑。碑文には「剥製（はくせい）」の一節が選ばれたが、これは井伏鱒二による選定であった。

その碑銘は次のとおり。

長い間のあらくれた放浪生活のなかで　私の夢は母を慕ふて蒼ざめる夜が多かった　母の許へ帰らねばならぬと考へた

出品者・協力者（五十音順、敬称略）

仮野 慎一
熊谷 真理人
竹内 知徳
田中 祐子
柳沢 孝子
矢野 利裕
和田 明子
小田原市郷土文化館
小田原市立前羽小学校
神奈川県立小田原高等学校
神奈川県立小田原高等学校同窓会
神奈川県立神奈川近代文学館
国際医療福祉大学
国立国会図書館
神静民報社
練馬区立美術館
横須賀美術館
早稲田大学図書館

小田原文学館 特別展
生誕120年記念 牧野信一の心象風景
主催　小田原市立図書館
印刷　平成28年10月
発行　小田原市立図書館
※無断転載を禁じます。

牧野信一　略年譜

＊は文学史事項、世の中の出来事

明治29年（１８９６）０歳　＊尾崎紅葉「多情多恨」
・11月12日、小田原町緑一丁目（上幸田角屋敷）に生まれる。
明治30年（１８９７）１歳　＊島崎藤村「若菜集」
・父の久雄がアメリカ合衆国へ渡る。
明治36年（１９０３）７歳　＊小杉天外「魔風恋風」
・尋常小田原小学校に入学する。
明治38年（１９０５）９歳　＊夏目漱石「吾輩は猫である」、日露戦争終結（１９０４～）
・祖父が急死したため、父が帰国する。
明治42年（１９０９）13歳　＊北原白秋「邪宗門」
・県立第二中学校（現在の小田原高校）に入学。
大正３年（１９１４）18歳　＊夏目漱石「こころ」、第一次世界大戦開始（～１９１９）
・早稲田大学高等予科に入学する。
大正５年（１９１６）20歳　＊芥川龍之介「鼻」
・早稲田大学に進学する。
大正８年（１９１９）23歳　＊宇野浩二「蔵の中」、雑誌「改造」「キネマ旬報」創刊
・早稲田大学英文学科を卒業。
・時事新報社の編集局に勤め、「少年」「少女」の編集・執筆に携わる。
・同人誌「十三人」を創刊する。
大正10年（１９２１）25歳　＊志賀直哉「暗夜行路」
・鈴木せつと結婚。
大正11年（１９２２）26歳　＊芥川龍之介「トロッコ」
・小田原町新玉二丁目に移っていた実家に転居する。
・時事新報社を退職する。
・「十三人」の後継誌「白磁」が創刊される。
・長男の英雄が生まれる。
大正12年（１９２３）27歳　＊横光利一「蝿」、雑誌「文藝春秋」創刊、関東大震災
・熱海町へ転居するが、関東大震災で被災し、小田原の実家に戻る。
・東京に単身で移る。
・「随筆」が創刊する際に、編集者となる。
大正13年（１９２４）28歳　＊谷崎潤一郎「痴人の愛」
・父が急死する。
・妻子を小田原から呼び寄せて同居する。
・「父を売る子」を執筆。「新潮」５月号に発表する。
・初の作品集『父を売る子』を新潮社から出版する。
・「随筆」が休刊する。
昭和２年（１９２７）31歳　＊芥川龍之介「歯車」、岩波文庫刊行開始
・小田原の実家に転居する。
昭和４年（１９２９）33歳　＊小林多喜二「蟹工船」、日本プロレタリア作家同盟結成
・東京の上野で開催された日本美術院展に、牧雅雄が制作した胸像

《牧野氏像》が出品される。
昭和５年（１９３０）34歳　＊三好達治「測量船」
・尾崎士郎の勧めで、東京郊外の荏原郡入新井町に転居する。
・『西部劇通信』を春陽堂から刊行。
昭和６年（１９３１）35歳　＊坂口安吾「風博士」、満州事変勃発
・「酒盗人」を執筆。翌年の「文藝春秋」昭和７年２月号に発表。
・「時事新報」夕刊に「日本橋」を連載する。
・「心象風景」を執筆し、「文科」第１輯～第４輯に発表。
・「ゼーロン」を執筆し、「改造」10月号に発表。
・「文科」を春陽堂から創刊して、編集主幹になる。
昭和７年（１９３２）36歳　＊嘉村礒多「途上」、五・一五事件
・「文科」第４輯（最終号）を出す。
昭和８年（１９３３）37歳　＊尾崎一雄「暢気眼鏡」
・「心象風景」を執筆し、「文藝春秋」３月号・６月号に発表。
・家族とともに曽我村上大井（現在の足柄上郡大井町）で避暑。
昭和９年（１９３４）38歳　＊中原中也「山羊の歌」
・小林秀雄とともにエドガー・アラン・ポー作『ユレカ』を翻訳する。
・家族とともに山田村（現在の足柄上郡大井町）で避暑。
・横須賀に転居する。
昭和10年（１９３５）39歳　＊川端康成「雪国」
・「城ヶ島の春」を執筆。「東京朝日新聞」３月23日～26日号に発表。
・『ユリイカ』を小川和夫との共訳で芝書店から刊行する。
・東京に戻る。このころ神経衰弱がひどくなる。
昭和11年（１９３６）没　＊堀辰雄「風立ちぬ」、二・二六事件
・単身で小田原の実家に転居する。
・自選作品集『鬼涙村』『酒盗人』を芝書店から刊行。
・３月24日、小田原町新玉二丁目の実家で縊死。（享年39）
　遺稿に「サクラの花びら」など。
・３月26日、足柄村寺町の清光寺で葬儀を行う。
昭和12年（１９３７）　＊太宰治「二十世紀旗手」、日中戦争開始
・宇野浩二が中心となり『牧野信一全集』全３巻が第一書房から刊行される。

昭和51年（１９７６）生誕80年・没後40年
・城山公園に牧野信一文学碑が建てられる。
平成８年（１９９６）生誕100年・没後60年
・小田原文学館で生誕100年展が開催される。
平成14年（２００２）
・『牧野信一全集』全６巻が筑摩書房から刊行される。
平成28年（２０１６）生誕120年・没後80年
・小田原文学館で生誕120年展が開催される。